



2026年の宮城県におけるスルメイカの漁況予測

令和8年6月18日  
宮城県水産技術総合センター  
環境資源チーム

本県のスルメイカの年間漁獲量は、6月の底びき網漁船（小底+沖底）のスルメイカ CPUE（トン/隻）によって概ね予測できることが知られている（増田・時岡 2026）。また、太平洋を北上したスルメイカが、本県沿岸および沖合に定着し、好漁となるかどうかについては、7月～9月の表面水温と100m以深の水温によって決まることが知られている（永島・佐藤 1987）。

そこで下記の式を使い、今漁期のスルメイカ漁獲量の見込みを推定した。

データセット：

$$Y = 1759.7X_1 + 6091.3 \quad (n=41, r^2=0.545, p<0.01)$$

Y；スルメイカ（1月～12月）の漁獲量（トン）

X<sub>1</sub>；6月の底びき網漁船のスルメイカ CPUE（トン/隻）

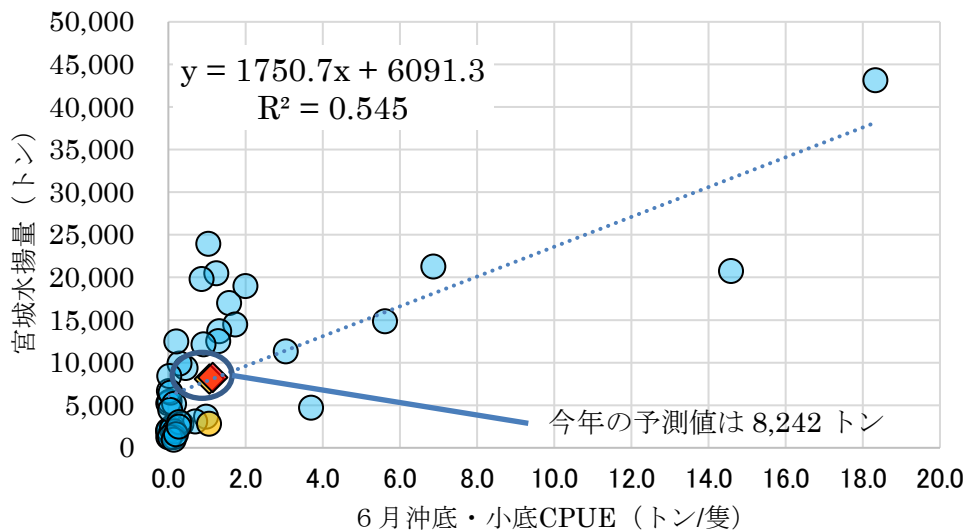


図1 1982年～2026年漁期における6月の底びき網漁船のスルメイカ CPUE (kg/隻) と宮城県のスルメイカ水揚量 (トン) の関係。黄色の◇は2025年漁期の予測値、黄色の○は2025年漁期の実際の水揚量、赤色の◇は2026年漁期予測値。

※ただし、6月の底びき網漁船のスルメイカ CPUE (トン/隻) は6月1日～6月16日までの暫定値 (1.155 トン/隻※沖底は1トン、近底は0.7トン、小底の一部が0.4トンの水揚げ制限を行いながらの操業のため、沖で放流した分を勘案して×1.5で計算) で作成しているため、今後のスルメイカの漁獲状況次第で多少変わる可能性がある。

今期のスルメイカの漁獲予測は8,242トンで、前年並みの来遊量になると予測されました。ただし、TACの関係で実際の水揚量は昨年並みの2,000トン程度になると考えられます。

6月15日時点の海洋環境は、三陸～常磐海域の表面水温が15℃台、200m深に5℃以下の冷水が残っているため、三陸沖にスルメイカが滞留しやすく、中漁～好漁となりやすい状況です (図2)。

以上から、現時点では、今年は昨年に引き続きスルメイカが三陸沖で継続して漁獲されやすい状況にあると言えます。6月に調査船で漁獲されたスルメイカの平均外套長は約10cm(体重20g;月齢約5か月)主体であったことから、9月には外套長20cm~25cm(体重200~250g程度;月齢8か月)の10~12.5倍のサイズとなります。そのため、6月~8月の漁獲を控えることで、資源管理をしながら効率的な漁業を行うことが可能となります。

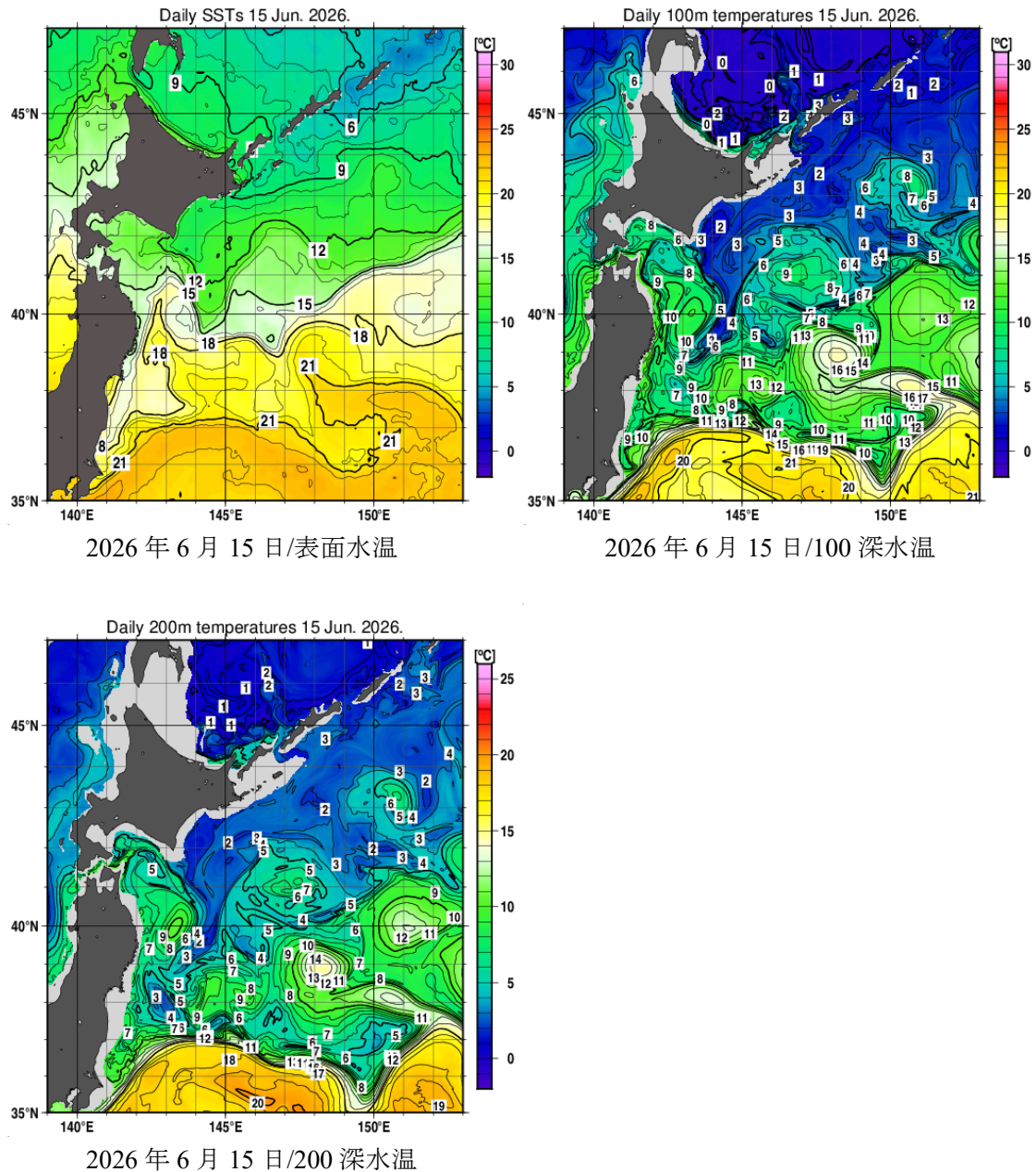


図2 気象庁海洋の健康診断表による2026年6月15日の表面水温、100m深水温、200m深水温

### 参考 1

宮城県のスルメイカの水揚量は、2011 年以降は減少傾向にあり、近年はスルメイカ資源の減少により 1 千トン台の低水準で推移していたが、2020年はやや回復して3.0千トンとなった。しかし、2021年は再び減少し、2022年はついに1千トンを割り込んで940トンで過去最低となった。その後徐々に増加し、2025年の水揚量はTACによる漁獲制限が行われる中、2,789トンとなり、水揚金額は、魚価高による影響もあって、15億円となった。沖底CPUEは水揚量の増減とほぼ同様の推移となって、2023年以降徐々に増加し、2025年は1,080 kg/隻となった。

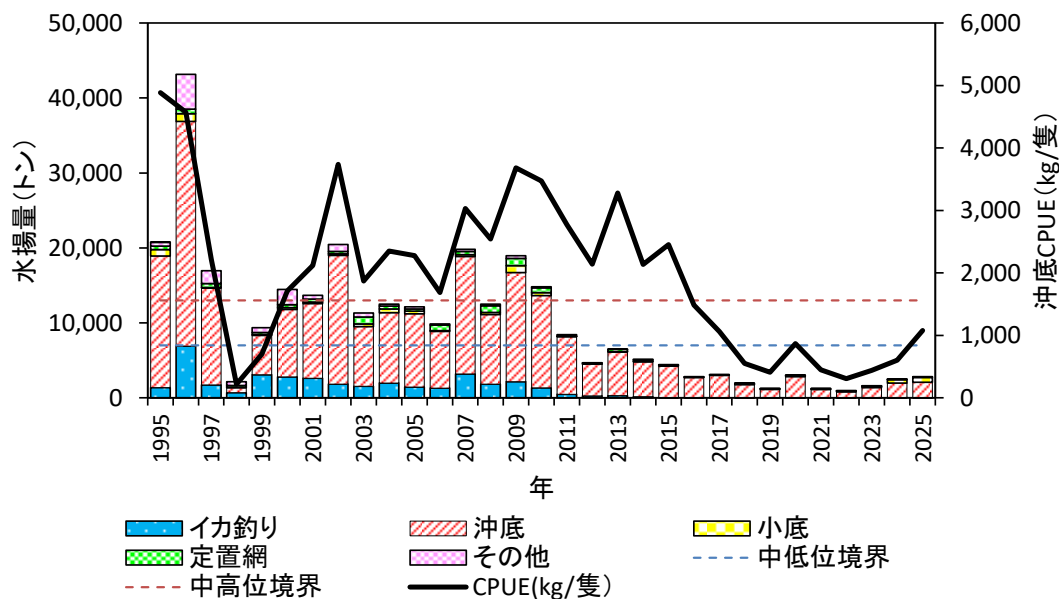


図 3 宮城県におけるスルメイカの水揚げ動向（暦年データ）

宮城県水産技術総合センターが毎年 6 月に実施している仙台湾着底トロール調査（タラ類新規加入量調査）において、St.4（水深 100 m）で小スルメイカ約 50 kg が混獲され、昨年や一昨年を上回る尾数となっています（図 4）。また、6 月 16 日に石巻魚市場へ水揚げされた大型定置網にも小スルメイカの混獲が多く見られたことから（図 5）、2026 年のスルメイカの仙台湾への来遊は多いと考えられます。

仙台湾着底トロール調査スルメイカ漁獲尾数

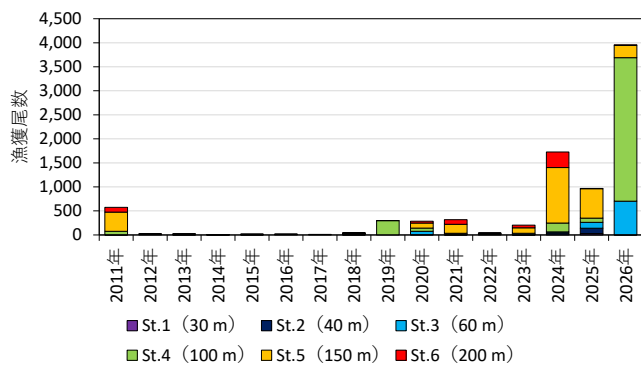


図 4 6 月の仙台湾着底トロール調査のスルメイカ漁獲尾数と St.4 での漁獲物の一部（右写真）



図5 6月16日に田代島大型定置で混獲された外套長7~8 cm小スルメ（左写真）と金華山大型定置（右写真）の15 cm前後の小スルメ。沖のほうやや大きい。田代島大型定置には、前日10トンの小スルメが混じったとのこと。